2015.5.30

東洋医学の本質を探るⅡ

*漢方・鍼灸を基礎づける思想とは何か〜『黄帝内経』入門*

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　東洋医学基礎 特別講座

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 於・医科歯科大学

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「松塾」主宰　松田博公

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 windhorse@nifty.com

Ⅰ．はじめに

　わたしのお話しは、漢方・鍼灸医学を基礎づける思想とは何かです。直接には、『黄帝内経』（現存の『黄帝内経素問』『黄帝内経霊枢』を便宜的にこう呼んでおきます）を貫く思想の枠組みを問うことです。

　『素問』『霊枢』の成立年代については、複雑な議論を必要としますが、とりあえず約2000年前にまとめられた最古の中国医学書であるとだけしておきましょう。その思想は、漢方・鍼灸医学にとって、「原型」の位置にあります。日本でも少なからず関心が払われ、読解の伝統もあります。しかし、現在の鍼灸界の『黄帝内経』へのアプローチは混乱しています。

　『黄帝内経』を「原型」として捉えることは、個々の臨床家の治療とは直結しません。いわば他流派なのです。しかし、多くの鍼灸師はその意識を持たず、日本とは異質な文化が生んだ医学書だという緊張感も乏しいまま、歴史的段階を飛び越えて自分の臨床を根拠付けるバイブルとして読もうとしてきました。そうすると、すぐに挫折します。

　『黄帝内経』の療法は刺絡が多いが、自分は刺絡を使わないので関心が持続しない。天文暦法、政治論、宇宙論、数術など古代思想に関連する個所は読み飛ばし、自分の臨床に都合のよい所のみつまみ食いする。あるいは、『素問』の最初の四、五篇のみを読み、『黄帝内経』は「養生の書」だと誤解する。『黄帝内経』は「養生の書」ではなく、「生き方の書」なのです。この違いについては本講義からお分かりになるでしょう。

　『黄帝内経』を読むとは、『黄帝内経』がそこから立ち上がってきた中国古代の宇宙観、生命観を読むことです。そういう読み方が、古代ギリシャやインドなどとも共通する、伝統医療の思想を知ることであり、また、わたしたちの臨床を豊かにしてくれます。『黄帝内経』の中核は、もちろん身体の構造、生理、病理、診断・治療に関する医療知識ですが、それを体系化したのは、戦国時代から漢代の人々がそれによって政治や人生を律した生き方、つまり自然観や宗教観、宇宙と人間の関係論でした。それは、『黄帝四経』『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』など、当時の政治的な思想書に結実しているものと同じです。

　中国の戦国時代（紀元前403年〜紀元前221年）は、儒家、墨家、道家、陰陽家、法家、兵家など諸子百家が論争した自由思想の時代でした。その百花斉放の思想、文化地図は、やがて統一帝国の成立を前に集約されていきます。相互に対立し矛盾する諸子百家思想は、天地宇宙の運行の法則に従って政治・軍事を行う「黄帝」思想と、君主が清静無為の修養を積めば、心身を健康にし国家を安泰にできるという「老子」思想を中軸に統合されます。それが「黄老思想」と呼ばれる蕩々とした潮流であり、上記の『黄帝四経』以下の政治書を作り出し、『黄帝内経』も黄老思想を基盤とする医学書として成立したのです。

　今回、わたしが述べようとする『黄帝内経』に記された漢方・鍼灸医学の「原型」の思想とは次の事柄です。

　・人は天地の気から生まれ、四季の気に育まれる。

　・人と天地宇宙は感応し一体で、構造も機能も同じである。

　・陰陽、五行、天地人三層構造は、政治から人体まで貫く。

　・天地の気は循環し、人体の気も循環する。

　・天地宇宙と人体の一体性は、天文暦法、音楽、人体の「数」で証明される。

　・生き方も治療も、天地の法則に則らなくてはならない。

　『黄帝内経』の医療の枠組みは、中国古代を席捲した半ば合理的、半ば宗教的な「天地宇宙教」とでも呼ぶべき信念の体系だったのです。

　こうした解読作業を通して、わたしたちは中国とは異なる文化、思想を基盤に育ってきた日本の漢方・鍼灸医学を対照的に写し出す「鏡」を得ることができるのです。

Ⅱ．名は体を表す〜「黄帝内経」の「黄帝」の意味

　『黄帝内経』の書名が初めて歴史に現れるのは、後漢時代に班固（32年〜92年）が編纂した『漢書』に含まれた文献リスト「芸文志」の方技略という項目です。そこに、「黄帝内経十八巻、外経三十九巻」とあります。芸文志は、前漢末の劉向（りゅうきょう）、劉歆（りゅうきん）という学者父子による『七略』を踏襲しているので、『黄帝内経』という書物が前漢末には実在していたことになります。しかし、この『黄帝内経』が、現存の『黄帝内経素問』『黄帝内経霊枢』だと考える研究者は、現在ではいないと言ってよいでしょう。それは、わたしたちが読むことができる『素問』『霊枢』が後漢以降、編纂されていく際に、恐らく中心的な部分として利用された医学書だったはずです。

　ともあれ、現存の『素問』『霊枢』にも付けられた「黄帝内経」というタイトルの「黄帝」が何を意味するかは、長く議論されてきました。中医学の『内経』というような教科書の記述では、「黄帝は神話上の帝王であり、軍事英雄であり、天文学、医学、暦学など諸々の技芸を創造した発明王であり、修行を達成し天に登った仙人であった。このように多ジャンルにまたがる総合的カリスマだったので、医学書の価値を高めるためにその名を付けた」というような説明がされています。偉大なる神話上の帝王の名を借りて書物に権威を与えたという考え方です。黄帝という帝王像に引き寄せた「あやかり」説です。

　しかし、わたしには異論があります。この問題は非常に重要です。本の書名などどうでもいいとは言えません。『黄帝内経』とはどんな思想を基盤にまとめられた医学書なのかにかかわる事柄だからです。『漢書』芸文志には、以下に挙げるように「黄帝」の名を冠する書物がたくさん記載されています。政治学、天文学、兵学、暦学、陰陽学、占術、房中術、神仙術など多ジャンルにまたがるこれら一群の「黄帝書」の名は単に黄帝の権威にあやかっているのでしょうか。そうではないという説を唱えたのが、中国学者、浅野裕一です。

　道家

 《黄帝四経》四篇。

 《黄帝銘》六篇。

 《黄帝君臣》十篇。起六国時，与《老子》相似也。

 《雑黄帝》五十八篇。六国時賢者所作。

 《力牧》二十二篇。六国時所作，託之力牧。力牧，黄帝相。

 陰陽

 《黄帝泰素》二十篇。六国時韓諸公子所作。

 小説

 《黄帝説》四十篇。迂誕依託。

 陰陽兵家

 《黄帝》十六篇。図三巻。

 《封胡》五篇。黄帝臣，依託也。

 《風后》十三篇。図二巻。黄帝臣，依託也。

 《力牧》十五篇。黄帝臣，依託也。

 《鬼容区》三篇。図一巻。黄帝臣，依託。

 天文

 《黄帝雑子気》三十三篇。

 曆譜

 《黄帝五家曆》三十三巻

 五行

 《黄帝陰陽》二十五巻。

 《黄帝諸子論陰陽》二十五巻。

 雑占

 《黄帝長柳占夢》十一巻。

 医経

 《黄帝内経》十八巻。

 《外経》三十（九）【七】巻。

 経方

 《泰始黄帝扁鵲兪拊方》二十三巻。

 《神農黄帝食禁》七巻。

 房中

 《黄帝三王養陽方》二十巻。

 神僊

 《黄帝雑子歩引》十二巻。

 《黄帝岐伯按摩》十巻。

 《黄帝雑子芝菌》十八巻。

 《黄帝雑子十九家方》二十一巻。

　1972年に中国の長沙の馬王堆という前漢墓の中から、絹に書かれた医学書、思想書などとともに『老子』書が見つかり、その巻前に四つの書物がありました。研究者たちは、それこそ『漢書』芸文志の『黄帝四経』だと推測しました。『漢書』芸文志に記録された書物は、すべて亡失しているが、そのうちの『黄帝四経』が忽然と地中から現れたと。そして、この『黄帝四経』を検討すれば、戦国から前漢初期まで中国思想界に大きな影響を及ぼしながら実態が定かでなかった「黄老思想」について明らかに出来ると考え、研究ブームが沸き起こったのです。浅野裕一の著書『黄老道の成立と展開』（創文社、1992年）は、一連の研究成果の中で注目すべきものです。

　浅野は『黄帝四経』とされている（これには異論もあります）四つの文献の共通する性格を導き出し、それを踏まえて「黄帝」書を定義づけました。その結論は、「黄帝」書とは領域はさまざまにまたがるが、共通の理念で括ることのできる書物であり、日月星辰、陰陽四時の周期性を天の理法と捉え、この「天道」を規範に政事、軍事を行えば国は栄え、そうしなければ亡びるとする「天道」思想が一貫しており、これこそが「黄帝」思想であるというものでした。

　では、浅野の結論を、浅野が触れていない、わたしたちの『黄帝内経』（『素問』『霊枢』の便宜的な総称）に当てはめてみましょう。彼の結論を敷衍すれば、「黄帝」のタイトルが、すでに内容を語っています。すなわち、『黄帝内経』とは、天地の気の循環と四季の変化の法則に則り医療を行う天人合一の医書であると、読まなくても推測できることになります。

　そういう目で、『素問』『霊枢』を読むと、実に現存の『素問』81篇の半分、『霊枢』81篇の三分の一の篇が、「人と天地宇宙は一体で、構造も機能も同じである」と語り、天文暦法や宇宙と人との関係、つまり「天人合一」について言及しています。その他の一見、生理学、病理学や鍼灸技術だけが展開されているように見える篇も、本当の理解は、天人合一観を下敷きにしなければ得られないことに気づきます。

Ⅲ．人は天地の気から生まれ、四季の気に育まれる

　このような『黄帝内経』の思想的枠組みについて、中華民国の名医、惲鉄樵（うんてつしょう、1878年〜1935年）は、一言で言いきっています。

　「内経全書はみな天をいう」（『群経見智録』1922年）

　また、現代中国の中西医結合派の大家、趙洪鈞もこう語っています。

　「20数年来、私は『内経』の体系と方法について考え、読者に簡明な綱領を与えたいと希望してきた。今では、はっきりとそれを悟っている。すなわち、『内経』の体系は天人相応の体系であり、『内経』の方法は比類取象の［現象の類似性を把握する］方法であると。」（「《内経》的体系和方法」『《内経》時代』2012年）

　彼らの指摘どおり、『素問』『霊枢』には、全篇にわたって、「ひとは宇宙の子だ」「天地と人は一体である」と強調する主旋律が流れています。

「それ、人は地に生まれ、命を天に懸（か）く。天地気を合する、これを命（なづけ）て人という。人よく四時に応ずる者は、天地これが父母となる。万物を知る者は之を天の子と謂う」（『素問』宝命全形論）

「人と天地相参じ、日月と相応じるなり。ゆえに月満つれば海水西に盛んにして、人の血気積み、肌肉充ち、皮膚緻（こま）かく、毛髮堅く、腠理とじ、煙垢［えんこう、脂垢］著（つ）く。この時に当たり、賊風に遭うといえども、その入るや浅くて深からず。其の月郭空（むな）しきに至れば、則ち海水東に盛んにして、人の気血虚し、その衛気去り、形独り居り、肌肉減り、皮膚縱（ゆる）み、腠理開き、毛髮残（そこなわ）れ、膲理（しょうり、皮膚のすじめ）薄く、煙垢落つ。是の時に当たり、賊風に遭えば則ちその入るや深く、其の人を病ますや卒暴なり。」（『霊枢』歳露論篇）

Ⅳ．人と天地宇宙は一体で、構造も機能も同じである

　このように、『黄帝内経』は、ひとは宇宙から生まれ四季に育まれ、天地と感応している存在だと強調します。さらに、ひとの身体の構造、機能は天地と同じだとまで考えるのです。

「黄帝伯高に問いて曰く。願くは聞かん、人の肢節、以って天地に応ずるは奈何。伯高答えて曰く、天は円く地は方なり。人の頭は円く足は方にしてもって之に応ず。天に日月有り、人に両目有り。地に九州有り、人に九竅有り。天に風雨有り、人に喜怒有り。天に雷電有り、人に音声有り。天に四時有り、人に四肢有り。天に五音有り、人に五藏有り。天に六律有り、人に六府有り。天に冬夏有り、人に寒熱有り。天に十日有り、人に手十指有り。（略）天に陰陽有り、人に夫妻有り。歳に三百六十五日有り、人に三百六十節有り。地に高山有り、人に肩膝有り。地に深谷有り、人に腋膕（えきかく）有り。地に十二経水有り、人に十二経脉有り。地に泉脉有り、人に衞氣有り。地に草蓂（めい）有り、人に毫毛有り。天に昼夜有り、人に臥起有り。天に列星有り、人に牙齒有り。地に小山有り、人に小節有り。地に山石有り、人に高骨有り。地に林木有り、人に募筋有り。地に聚邑有り、人にきん（月＋囷）肉（※肌肉の隆起）有り。歳に十二月有り、人に十二節有り。地四時に草をはやさざる有り、人に子無き有り。此れ人と天地相応ずる者なり。」（『霊枢』邪客篇）

　人体の十二経脈も、大地の大きな十二河川と繋がっている。これはもはや「天地宇宙教」です。

「黄帝、岐伯に問いて曰く。経脈十二は、外は十二経水に合して、内は五蔵六府に属す。それ十二経水は、それ大小深浅広狹遠近ありておのおの同じからず。五蔵六府の高下小大、穀を受くるの多少もまた等しからず。相い応じること奈何（いかん）ん。（略）岐伯答えて曰く、此れ人の天地に参じて陰陽に応ずるゆえんなり、察せざるべからず。足の太陽は外は清水に合し、内は膀胱に属し而して水道を通ず。足の少陽は外は渭水（いすい）に合し、内は胆に属す。足の陽明は外は海水に合し、内は胃に属す。足の太陰は外は湖水に合し、内は牌に属す。足の少陰は外は汝水（じょすい）に合し、内は腎に属す。足の厭陰は外は澠水（べんすい）に合し、内は肝に属す。手の太陽は外は准水（わいすい）に合し、内は小腸に属し、市して水道出づ。手の少陽は外は漯水（とうすい）に合し、内は三焦に属す。手の陽明は外は江水に合し、内は大腸に属す。手の太陰は外は河水に合し、内は肺に属す。手の少陰は外は済水に合し、内は心に属す。手の心主は外は漳水（しょうすい）に合し、内は心包に属す。凡（およそ）、この五蔵六府、十二経水は［繋がっていて］、外に源泉ありて内に稟（う）くる所あり。これ皆内外相い貫きて、環の端（はし）なきが如し。人の経もまた然り。故に天を陽と為し、地を陰と為す。腰以上を天と為し、腰以下を地と為す。故に海以北を陰と為し、湖以北を陰中の陰と為す。樟以南を陽と為し、河以北より湾に至るを陽中の陰と為す。潔以南より江に至るを陽中の太陽と為す。此れ一隅の陰陽なり。人と天地と相参ずるゆえんなり。」（『霊枢』経水篇）

　経脈は大地の河川と繋がり、いっぽう蔵府は国家機構に繋がっています。天地宇宙—国家—人体の気が絡み合う壮大なる網の目のイメージです。

「黄帝問うて曰く、願わくば十二蔵の相使貴賤は如何（いかん）を聞かんと。岐伯対（こた）えて曰く、悉（つ）くせるかな問うや、請いて遂くに之を言わん。心なる者は君主の官なり。神明これより出づ。肺は相傅（そうふ）の官（＝宰相）なり。治節これより出ず。肝は将軍の官なり。謀慮これより出ず。胆は中正の官なり。決断これより出ず。膻中は臣使の官なり。喜楽これより出ず。脾胃は倉廩（そうりん）の官なり。五味これより出ず。大腸は伝導の官なり。変化これより出ず。小腸は受盛の官なり。化物これより出ず。腎は作強の官なり。伎巧これより出ず。三焦は決瀆（けっとく）の官なり。水道これより出ず。膀胱は州都の官なり。津液ここに蔵さる。気化すれば則ち能く出ず。凡そ此の十二官は相い失するを得ざるなり。（略）故に主（＝君主、心）明かなれば則ち下、安んじ、此れを以て生を養えば則ち寿、世を歿（お）うるまで殆（あやうから）ず。以て天下を為（おさ）むれば則ち大いに昌（さか）んなり。主、明かならざれば則ち十二官危うし。使道（＝気血の道）閉塞して通ぜず。形乃ち大いに傷る。此れを以て生を養えば則ち殃（わざわい）あり。以て天下を為める者は、其の宗（＝国家、民族）大いに危うし」（『素問』霊蘭秘典論篇）

Ⅴ．陰陽、五行、天地人三層構造は、政治から人体まで貫く

　このようにひとと天地は気を媒介に一体です。中国古代人は、絶えず変化し続ける天地宇宙の気の構造を理解するために、いったん二分割、五分割し、各要素間の関係を究明する古代科学の方法を考案しました。それが政治から社会、文化のあらゆる面に適用された陰陽論、五行論です。『黄帝内経』はそれを、天地宇宙と身体は同型であるとする医学の構造論に当てはめたのです。

　「陰陽は天地の道なり。万物の綱紀、変化の父母、生殺の本始、神明の府なり。病を治するに必ず本を求めよ。故に積陽は天と為り、積陰は地と為り。陰は静、陽は躁なり。陽は生じ、陰は長ず。陽は殺らし、陰は蔵す。陽は気と化し、陰は形を成す。寒極まれば熱を生じ、熱極まれば寒を生ず。寒気は濁を生じ、熱気は清を生ず。清気は下に在れば、則ち飡泄を生じ、濁気は上に在れば、則ち䐜脹を生ず。此れ陰陽反し、病の逆従を作すなり。故に清陽は天と為り、濁陰は地と為る。地気は上りて雲と為り、天気は下りて雨と為る。雨は地気より出で、雲は天癸より出づ。故に清陽は上竅より出で、濁陰は下竅より出づ。清陽は腠理に發し、濁陰は五蔵に走る。清陽は四支を實し、濁陰は六府に帰す。」（『素問』陰陽応象大論篇）

「ゆえに天を陽となし、地を陰となす。腰以上を陽となし、腰以下を陰となす。」（『霊枢』経水篇）

「帝曰く、五蔵は四時に応ずる。各々収受するところ有るかと。

　岐伯曰く、有り。東方は青色、入りて肝に通じ、竅を目に開く。精を肝に蔵す。其の病むは驚駭を発す。其の味は酸、其の味は酸、其の類は草木、其の畜は雞、其の穀は麦なり。其の四時に応ずるや、上は歳星と為る。是れ以て春気は頭に在るなり。其の音は角、その数は八、是れ以て病の筋に在るを知るなり。其の臭は臊なり。

　南方は赤色、入りて心に通じ、竅を耳に開き、精を心に蔵す。故に病は五蔵にあり。其の味は苦、其の類は火、其の畜は羊、其の穀は黍（きび）なり。其の四時に応ずや、上は熒惑星と為る。是れを以て病の脉に在るを知るなり。其の音は徴、その数は七、其の臭は焦なり。

　中央は黄色、入りて脾に通じ、竅を口に開き、精を脾に蔵す。故に病は舌本に在り。其の味は甘、其の類は土、其の畜は牛、其の穀は稷（しょく、アワ）なり。其の四時に応ずるや、上は鎮星と為る。是れ以て病の肉に在るを知るなり。其の音は宮、其の数は五、其の臭は香なり。

　西方は白色、入りて肺に通じ、竅を鼻に開き、精を肺に蔵す。故に病は背に在り。其の味は辛、其の類は金、其の畜は馬、其の穀は稲なり。其の四時に応ずるや、上は太白星と為る。是れ以て病の皮毛に在るを知るなり。其の音は商、其の数は九、其の臭は腥なり。

　北方は黒色、入りて腎に通じ、竅を二陰に開き、精を腎に蔵す。故に病は谿に在り。其の味は鹹、其の類は水、其の畜は彘（てい、ブタ）、其の穀は豆なり。其の四時に応ずるや、上は辰星と為る。是れ以て病の骨に在ることを知るなり。其の音は羽、其の数は六、其の臭は腐なり。」（『素問』金匱真言論篇）

　同様に三つに分割する構造論があります。のちの時代に「三才」と呼ばれる天地人三層構造論です。これは、最初に説明した黄老思想系の政治書にも盛んに出てくる定型句で、『黄帝内経』でも重要な役割を担っています。

　「賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象（かた）どりて以て足を養い、中は人事に傍（なら）いて以て五藏を養う」（『素問』陰陽応象大論篇）

　「夫れ道なるものは、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知れば、以て長久すべし」（『素問』気交変大論篇）

　しかるに、古代中国人は単に天地宇宙や人体を三分割しただけではなかったのです。三分割したのをさらに三分割し脈診の診断部位を求めています。『難経』以降の脈診部を手首に求め、それを三分割してさらにそれを浮中沈に三分割するという方法も、この発想に基づくのです。ここには、「三」とその倍数の「九」にこだわる数術意識がうかがえます。そのことは、このあと検討します。

「黄帝問いて曰く、余、九鍼を夫子に聞く。衆多愽大にして、勝げて（＝すべてを尽くす）数うべからず。余、願わくば要道を聞かん、と。岐伯対えて曰く、妙なる哉、問いや。此れ天地の至数なり、と。

　帝曰く、願わくば天地の至数、人形血気に合し、死生を決するに通ずるを聞かん。之を為すこと奈何（いかん）と。岐伯曰く、天地の至数は一に始まり九に終る。一なるものは天、二なるものは地、三なるものは人なり。因りて之を三にす。三三なるものは九、以て九野に応ず。故に人に三部有り、部ごとに三候有り、以て死生を決し、以て百病を処し、以て虚実を調えて、邪疾を除くと。

帝曰く、何を三部と謂うと。

　岐伯曰く、下部有り、中部有り、上部有り。部に各々三候有り。三候は天有り、地有り、人有るなり。必ず指して之を導けば、乃ち以て真たり。

　上部の天は両額の動脈なり。上部の地は両頬の動脈なり。上部の人は耳前の動脈なり。中部の天は手の太陰なり。中部の地は手の陽明なり。中部の人は手の少陰なり。下部の天は足の厥陰なり。下部の地は足の少陰なり。下部の人は足の太陰なり。故に下部の天は以て肝を候（うかが）い、地は以て腎を候い、人は以て脾胃の気を候うと。帝曰く、中部の候、奈何と。

　岐伯曰く、亦、天有り、亦、地有り、亦、人有り。天は以て肺を候い、地は以て胸中の気を候い、人は以て心を候うと。

帝曰く、上部、何を以てか之を候わんと。

　岐伯曰く、亦、天有り、亦、地有り、亦、人有り。天は以て頭角の気を候い、地は以て口歯の気を候い、人は以て耳目の気を候う。三部なるものは各々天有り、各々地有り、各々人有り。三にして天を成し、三にして地を成し、三にして人を成す。三にして之を三にし、合すれば則ち九と為る。九は分ちて九野と為り、九野は九蔵と為る。故に神蔵は五、形蔵は四、合して九蔵と為す。五蔵已に敗れれば其の色は必ず夭（か）る。夭るれば必ず死すと。」（『素問』三部九候論篇）

　「余、小鍼を以て細物と為すなり。夫子（＝先生）乃ち上はこれを天に合し、下はこれを地に合し、中はこれを人に合すと言う。余、以為（おもえ）らく、鍼の意を過ぐと（＝鍼と関連させて天地人を語るのは大げさではないか）。願わくば其の故を聞かん。岐伯曰く、何れの物か天より大ならんや。夫れ鍼より大なるものは、惟（ただ）五兵（＝弓、矢、矛、戈［か、ほこ］、戟［げき、ほこ］など５つの兵器）なるもののみ。五兵なるものは死の備なり。生の具に非ず。且つ夫れ人なるものは、天地の鎮（＝天地万物のなかで最も重要な存在）なり、其れ参ぜざるべからざるか。夫れ民を治するものは、亦唯だ鍼のみ。夫れ鍼と五兵と、其れ孰（いずれ）か小なるか」（『霊枢』玉版篇）

Ⅵ．天地の気は循環し、人体の気も循環する



　　このように天地宇宙の気は、二元、三元、五元などの構造を持つのですが、中国人はそれが終わりなく循環することを特に「天道」の法則として注目しました。上下する天地の気、春夏秋冬の四時、日の出と日没、月の出と月の入り、北斗七星の柄の運行や動植物が生長收藏する生命のリズムの観察から、万物に当てはまり政治や人生の基準となる不変の摂理として循環の原理を取り出したのです。それは、「黄帝」思想の「天道」観として、『老子』の無為清静の思想と結びついて「黄老思想」の核心部になります。上記の黄老系文献、特に秦帝国成立直前の『呂氏春秋』では、宇宙の真理として「円道」の思想を謳いあげています。

　『黄帝内経』も同じです。人体の気は天地の気と同じく無始無終に循環するという認識がたくさん述べられています。これこそが循環する十二経脈論の宇宙論的根拠なのです。ここでは、皆さんの今後の研究に役立つように、「終わりてまた始まる」「環（たまき）の端なきが如し」などの定型句の主なものを集めてみました。

「清陽は天に上り、濁陰は地に帰す。是の故に、天地の動靜、神明は之［気の上下の循環］を綱紀と為す。故に［四時は］能く以て生長收藏し、終わりて復た始まる」（『素問』陰陽応象大論篇）

「経脈は流行して止まず、環周して休まず。寒気経に入りて稽遅［留止、徐行］すれば泣（しぶ）りて行らず。脈外に客するときは血少なし。脈中に客するときは気通ぜず。故に卒然として痛むなり」（『素問』挙痛論篇）

「凡（およそ）、この五蔵六府、十二経水は（繋がっていて）、外に源泉ありて内に稟（う）くる所あり。これ皆内外相い貫きて、環の端（はし）なきが如し。人の経もまた然り。」（『霊枢』経水篇）

「精専なるものは、経隧を行き、常に営して已（や）むこと無く、終りて復た始まる。是れを天地の紀（＝紀律）と謂う。故に気は太陰より出で、手の陽明に注ぎ、上行して足の陽明に注ぎ、下行して跗上に至り、大指の間に注ぎ、太陰と合す。上行して⋯⋯⋯⋯」（『霊枢』営気篇）

「気の行くことなきを得ざるや、水の流るるが如く、日月の行の休まざるが如し。故に陰脈はその蔵を営し、陽脈はその府を営し、環の端なきが如く、その紀（はじめ）を知ることなく、終わりてまた始まる。その流溢の気は、内は藏府に漑（そそ）ぎ、外は腠理を濡（うるお）す」（『霊枢』脈度篇）

　「人は気を穀に受け、穀は胃に入り、以て肺に与え伝え、五蔵六府、皆以て気を受く。其の清なる者を営と為し、濁なる者を衛と為し、営は脈中に在り、衛は脈外に在り、営周して休まず、五十にして復た大会す。陰陽相い貫き、環の端無きが如し。衛気は陰を行くこと二十五度、陽を行くこと二十五度、分れて昼夜を為す」（『霊枢』営衛生会篇）

「其の気五蔵に内（い）りて、外に肢節を絡（まと）う。其の浮気の経を循（めぐ）らざる者は、衛気たり。其の精気の経を行（めぐ）る者は、営気たり。陰陽相隨い、外内相貫き、環の端無きが如く、亭亭淳淳（＝流れ果てない）として、孰（た）れか能（よ）くこれを竊（きわ）めんや。⋯⋯⋯能く陰陽十二経を別つ者は、病の生ずる所を知る」（『霊枢』衛気篇）

「黄帝曰く、営衛の行くや、上下相貫き、環の端無きが如し。今其の卒然と邪気に遇い、及び大寒に逢うことあれば、手足懈惰（かいだ、だるく力ないこと）せん。其れ脈は陰陽の道、相輸の会なれば、行くこと相失するや、気は何に由りて還（めぐ）る？　岐伯曰く、夫れ四末の陰陽の会なる者は、此れ気の大絡なり。四街なる者は、気の径路なり。故に絡絶ゆれば則ち径通じ、四末解くれば則ち気従い合し、相輸（おくる）こと環の如し。黄帝曰く、善し。此れいわゆる環の端無きが如く、其の紀（はじめ）を知るなく、終わりて復た始まるとは、此れをこれ謂うなり。」（『霊枢』動輸篇）〜経脈が閉塞した際の代行作用について述べている。

Ⅶ．天地人の一体性は、天文暦法、音楽、「数」で証明される

　『黄帝内経』では、このように人体の構造、機能、気の運動法則などさまざまな側面から天地とひとは一体であることを繰り返し語ります。だめ押しの論理が、「数術」です。ひとの身体を構成する「数」は、天地を構成する「天数」と一致しているので、両者は一体だという証明の仕方です。

　数術には、基準となる数があります。「天数」の言葉が示すように、多くは天文暦法に関わる数です。五蔵六府の「五」「六」は暦に割り当てられた十干十二支の60年周期と関係する「天六地五」の数から来ています。十二経脈は１年十二ヵ月、二十八脈は天空の二十八宿星座、三の重視は天地人三層構造と関連しています。戦国時代からは音楽の楽律が三分損益法というピタゴラスの楽律と同じ方法で作り出されるようになり、三とその倍数の六、九、二十七、八十一などが特別に聖化されるようになります。音楽は宇宙とひとを繋ぎ国家を安泰にさせる媒介として、儒家が最も重視した政治の道具でした。『黄帝内経』には、陰の六律、陽の六律、合わせて十二の楽律が十二経脈を作った、と書かれているぐらいです。

「人の天道に合するや、内に五蔵有り、以って五音、五色、五時、五味、五位に応ずるなり。外に六府有り、以って六律に応じ、六律は陰陽諸経を建てて之を十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脉に合する者なり。此れ五蔵六府の天道に応ずるゆえんなり。」（『霊枢』経別篇）

「天は六六の節を以ってし、以って一歳を成し，人は九九を以って制会し、計（かぞ）うるに人また三百六十五節有りて、以って天地をなして久し。」（『素問』六節蔵象論篇）

「人に四経十二従有りとは，何の謂いぞや。岐伯こたえて曰く、四経は四時に応じ、十二従は十二月に応じ、十二月は十二脉に応ず。」（『素問』陰陽別論篇）

「天は円く地は方なり。人の頭は円く足は方にしてもって之に応ず。天に日月有り、人に両目有り。地に九州有り、人に九竅有り。天に風雨有り、人に喜怒有り。天に雷電有り、人に音声有り。天に四時有り、人に四肢有り。天に五音有り、人に五藏有り。天に六律有り、人に六府有り。天に冬夏有り、人に寒熱有り。天に十日有り、人に手十指有り。辰に十二有り、人に足十指・茎・垂有り以って之に応ず。女子は二節足らざるも以って人形を抱く。天に陰陽有り、人に夫妻有り。歳に三百六十五日有り、人に三百六十節有り。」（『霊枢』邪客篇）

　理解すべきことは、『黄帝内経』では、「数」はわたしたちのように、無機的な記号として事実を表し、他と区別し、計算するために使われてはいないことです。それは、あらゆる存在が天地、宇宙と繋がっていることを強調するマジカルな道具として使われているのです。ここでは触れませんが、経脈の長さも実数ではなく、聖なる三と五の数を組み合わせた「数術」の数字になっているほどです。それほどまでに、ひとは天地宇宙と一体であること、「ひとは宇宙の子である」ことを確認したかったのです。

Ⅷ．生き方も治療も天地の法則に則らなくてはならない

　このように見てくると、『黄帝内経』が普段のひととしての生き方や病んだときの治療法について、立てていた基準も自ずと分かるでしょう。

「夫れ四時陰陽は万物の根本なり。聖人の春夏に陽を養い、秋冬に陰を養う所以は、其の根に従うを以てす。故に万物と生長の門に沈浮す。其の根に逆えば則ち其の本伐られ、其の真壊す。故に陰陽四時は万物の終始なり。死生の本なり。之に逆えば則ち災害生じ、之に従えば則ち苛疾起らず。是を道を得たりと謂うなり。陰陽に従えば則ち生き、これに逆えば則ち死す。これに従えば則ち治し、これに逆えば則ち乱れる。」（『素問』四気調神大論篇）

「春は生じ、夏は長じ、秋は收め、冬は蔵する。是れ気の常なり。人また之に応ず。以って一日を分けて四時となし、朝は則ち春となし、日中は夏となし、日の入りは秋となし、夜半は冬となす。り、人も亦たこれに応ず。一日を以て分かちて四時と為す。朝は則ち春たり、日中は夏たり、日入は秋たり、夜半は冬たり。朝は則ち人気始めて生じ、病気衰う、故に旦に慧し。日中は人気長じ、長ずれば則ち邪に勝つ、故に安んず。タは則ち人気始めて衰え、邪気始めて生ず、故に加う。夜半は人気蔵に入り、邪気独り身に居る。

　黄帝曰く、其れ時に反する者あるは、なんぞや。岐伯曰く、是れ四時の気に応ぜず、蔵独り其の病を主る者なり、是れ必ず蔵気の勝たざる所の時を以てする者は甚だしく、其の勝つ所の時を以てする者は起つなり。

　黄帝日く、これを治するはいかん。岐伯曰く、天の時に順えば、すなわち病、期を与うべし。順う者は工たり、逆らう者は麤（そ）たり。」（『霊枢』順気一日分為四時篇）

「陰陽に従えば則ち生き、これに逆らえば則ち死す。これに従えば則ち治まり、これに逆らえば則ち乱れる」（『素問』四気調神大論篇）

　「賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象りて以て足を養い、中は人事に傍いて以て五蔵を養う。天気は肺に通じ、地気は嗌に通ず。風気は肝に通じ、雷気は心に通ず。谷気は脾に通じ、雨気は腎に通ず。六経は川為（た）り、腸胃は海為（た）り、九竅は水注之気為り。天地以て之を陰陽と為し、陽の汗、天地の雨を以て之を名づく。陽の気は、天地の疾風以て之を名づく。暴気雷を象（かたど）り、逆気陽を象る。治するに天の紀に法らず、地の理を用いざれば、則ち災害至るなり。」（『素問』陰陽応象大論篇）

　「黄帝問いて曰く。用鍼の服（こと、＝技術）、必ずや法則あらん、今、何の法、何の則や。岐伯対（こた）えて曰く、天に法り地に則り、合するに天光（＝日月星）を以てす。帝曰く。願くは卒（ことごと）くこれを聞かん。岐伯曰く、凡そ刺の法、必ず日月星辰四時八正（＝二至、二分、四立）の気を候い、気定まりて乃ちこれを刺す。是の故に天温かに日明らかなれば、則ち人の血、淖液（＝潤滑に流れ）して、衛気浮かぶ。故に血寫し易く、気行り易し。天寒く日陰（くも）れば、則ち人の血凝泣（＝凝滞）して衛気沈む。月始めて生ずれば、則ち血気始めて精にして、衛気始めて行（めぐ）る。月郭満つれば、則ち血気実し、肌肉堅し。月郭空なれば、則ち肌肉減じ、経絡虚し、衛気去り、形独り居る。是を以て天の時に因りて血気を調うるなり。是を以て天寒くして刺すこと無かれ、天温かにして疑うこと無かれ。月生じて寫すること無かれ、月満ちて補すること無かれ。月郭空にして治すること無かれ。是れを［天の］時を得てこれを調うと謂う」（『素問』八正神明論篇）

「いま末世の刺や、虚するものはこれを実し、満つるものはこれを泄らす。これ皆衆工の共に知るところなり。もしそれ天に法り地に則れば、応ずるに従い動ず。これに和する者は響くが如く、これに従う者は影の如し。道に鬼神なし、独り来たり独り往く」（『素問』宝命全形論篇）

　ひとの生命が天地と合一、感応しているのだから、日常の生き方、病気になったときの治療法も、天地の法則に合致していなければならない。それが『黄帝内経』の考え方なのです。

Ⅸ．『黄帝内経』と黄老思想の思想構造は同じ

　ひとは天地の気から生まれ、四季の気に育てられ、構造も機能も天地と同じ。天地宇宙のあらゆる存在も国家も人体もすべて繋がっている。ひとの身体の數も天数と一致している。このような思想、哲学、宗教観から、経脈論、蔵府論、が導かれます。生理学、病理学、診断治療論も、この思想の枠組みに従って体系化されます。

　・経脈論［十二月、十二河川、十二楽律］

　・蔵府論［天六地五→十一経脈論］

　・生理学［天地の気の陰陽上下の循環］

　・病理学［上実下虚（＝頭熱足寒）］

　・診断治療論［天気・邪気の虚実を診て補瀉する］

　このような『黄帝内経』の基礎的な構図は、当時の政治世界の構図と同じでした。それを教えてくれるのが、政治学者、丸山眞男による「古代中国の世界像」の図式です。丸山は、敗戦後の日本の民主主義運動に影響を与えた学者ですが、日本人の思想の特徴を浮き彫りにするために、キリスト教、インド、中国などの世界像について考察しました。彼によれば、中国の世界像は次のような同心円の図で表されます。

　「儒教とか道教とかもふくめた古代中国の宇宙観をとらえると、こういう同心円として描き得ると思うんです。（Ａ）が天道とか天命とかいわれる。（Ａ）は易でいえば「天行は健なり自ら彊（つと）めて止まず」あるいは「天の神道を観るに、四時（春夏秋冬）たがわず」。つまり天は完全な規則性をもってぐるぐる回っている。春夏秋冬の順序が少しもたがわないで永遠に循環する。これを天道といい、自然界の「四時」が永久に変わらぬ規則性をもっているというのが永遠像なのです。

　それに対して、（Ｂ）が人です。人間の理想の境地は「天人合一」なんです。聖人というのは、天道と完全に同心円を描く。普通の人間の行動というのは、こういうふうに（Ｃ）くにゃくにや曲がりながらゆく（笑）。天道と人道とが完全に常に同心円を描いているのは聖人だけなんです。普通の人間というのは、人欲とか、老子の場合、「作為」によって妨げられて、軌道がそれるために同心円を描かない。だから「道」を求めるというのは、「四時以て序をなし、星辰以て行われる」（荀子）のをモデルとして、それに近づくよう努力することです。

　その意味で、これを自然法的な歴史観ということができる。（A）が自然法です。この自然法と同心円を描く規範意識が「道」という思想になる。天授とか、天命というときには「天」を比喩として人格化している。しかし天というのは「自然」ですから、完全に人格化された神にはならない。そういう意味で天が絶対化されるのではなくて、むしろ自然の法則性、四季の永遠の規則性ある循環が一番根底にある。儒教と老荘のように正反対の教えでも、その点は共通し、それが中国思想の「原型」です。」（「日本思想史における「古層」の問題」）

　中国古代の政治は、この理想の「原型」に従って構想されました。見てきたようにこの世界像は、そのままぴったりと『黄帝内経』の世界像に重なります。ひとの心身は天道と同心円を描き、四時と同じく永遠に変わらぬ規則性を持っているのが理想であるけれど、それは聖人のみが可能で、普通の人間は同心円の線から外れてぐにゃぐにゃ曲がった人生の線を描く。それが病気になるということである。そこで治療をし、天道に見合った同心円の軌跡を描かせてあげるのが医療だ、というのが『黄帝内経』の思想です。政治も医学も同じ自然法的な宇宙像（天に法り、地に則る）を枠組みとして成立していたのです。

　このような世界像を最初に体系化したのは、戦国末から前漢に登場し大きな思想潮流となった黄老思想でした。『黄帝四経』『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』という戦国末から前漢に至る黄老系文献には、「天道」に従って政治、軍事を行うべしという自然法思想が貫いています。それは『黄帝内経』の根幹の思想と同じであり、だから、『黄帝内経』は黄老系の医学書であるといえるのです。

　いま、これら黄老系文献と『黄帝内経』との思想の共通性を逐一検討する余裕はないので、一つだけ典型的な文章を挙げておきましょう。前漢・武帝の時代に董仲舒（紀元前176年?〜紀元前104年?）がまとめたとされる政治書『春秋繁露』は、儒家の立場で黄老思想を吸収した著作です。全篇にわたってひとと天地は一体であるという天人合一論が語られていますが、その「人副天数（人、天数にそう）」篇には、次のようにあります。

「ただ人のみ独り能く天地に偶す。人に三百六十節有るは、天之数に偶す。形体骨肉は、地の厚きに偶す。上に耳目の聡明有るは、日月の象なり。体に空竅理脈有るは、川谷の象なり。心に哀楽喜怒有るは、神気の類なり。(略) 天地の符、陰陽の副、常に身に設けらるれば、身はなほ天のごとし。数と之と相参わる、故に命と之と相連なるなり。天は終歳の数を以て、人の身を成す。故に小節三百六十六は、日の数に副う。大節十二分は、月の数に副う。内に五蔵有るは、五行の数に副う。外に四肢有るは、四時の数に副う。乍（たちま）ち視乍ち瞑きは、昼夜に副う。乍ち剛乍ち柔なるは、冬夏に副う。乍ち哀乍ち楽なるは、陰陽に副う。心に計慮有るは、度数に副う。行いに倫理有るは、天地に副う。」

　ここには、文体こそ違え、上で検討した『霊枢』邪客篇と瓜二つの天人合一身体論が展開されています。両者の絆について、強い印象を得ることができます。それは、現存の『素問』『霊枢』の医学思想の発生史について示唆するとともに、政治思想と医学思想の同質性を物語っています。

Ⅸ．最後に〜『黄帝内経』の世界像が照らし出すもの

　　『黄帝内経』の世界像、宇宙観を、漢方・鍼灸の思想の「原型」として把握するこの試みによって、三つの課題に答えることができます。

（1）漢方・鍼灸の実践論である生理学、病理学、診断・治療論を、より大きな臨床の視野の中に位置づけることができる。

　漢方・鍼灸の臨床家が、陰陽・五行論、藏府・経絡論、診断・治療論から学び始めるのは自然です。しかし、その根底に古代の世界像、宇宙観があると知ることによって、より広々とした臨床の展望を得ることができます。「『内経』全書は皆天を言う」と理解することから、中国古代医学が教えているのは、単なる治療技術でも養生法でもなく、天とともに生きる「生き方」のアートであることが分かるでしょう。

（2）世界の伝統医療共通の、文明を問い直す臨床思想を確認できる。

　中国古代医学、古代ギリシャ医学、インド医学、チベット医学、アメリカのネイティブのシャーマン医学など、世界の伝統医療の考え方は共通しています。それは、ひとは宇宙から切り離されることで病気になる、もう一度、宇宙との絆を取り戻すことで健康を回復するというものです。

　この立場は、必然的に、宇宙から切り離され、心身のバランスを失い、病人を生み出し続ける現代文明の在り方を問い直すことになります。絶えず病人を生み出す文明をそのままに、ただ病人を治療するだけの治療医療は、伝統医療の本来の立場ではありません。

　『黄帝内経』は天に順い政治を行い医療を行うことで人々は健康になると主張します。どうすれば病人を生み出さない社会を作り出せるかという問いかけに、『黄帝内経』は「天に順う」という回答を提示しました。その意味で、中国古代医学には伝統医療の真髄が宿っています。「伝統医療」の「伝統（トラディショナル）」とは、単に古いという意味ではありません。宇宙と共に生きる、万物は繋がっているという古代精神を現代に伝えているという意味です。

（3）日本漢方・鍼灸の思想構造を解明する鏡を持つことができる。

　日本漢方・鍼灸の臨床家は、直感的に日本の漢方・鍼灸と中医学が異なることを知っています。中医学は、『黄帝内経』の医学が歴史的、段階的に展開し、現在に至ったものです。日本の漢方・鍼灸は、『黄帝内経』の医学やその後の歴代の中国医学を受け入れ、日本的に変容させたものです。

　見てきたように、『黄帝内経』の成立には、古代中国の天人合一の世界像、宇宙観や文化が基礎になり、それらはその後の中国医学の展開に際して、おおむね継承されています。しかし、日本人が中国医学を受容する際には、日本の文化、精神構造によってこの基礎概念は濾過され、時には放棄され、日本的な漢方・鍼灸思想になったのです。

　従って、日本の漢方・鍼灸の特徴を理解するには、『黄帝内経』に結実している中国医学の原型と比較するのが早道です。『黄帝内経』の思想構造を整理する作業は、日本漢方・鍼灸の思想を写す「鏡」を得る一歩でもあるのです。

　　　　　　　　　　　　 　※ 松塾レジメのワードファイルなどを、東京都は

　　　　　　　　　　　　　　　　り・きゅう・あん摩マッサージ指圧師会（略称・都

　　　　　　　　　　　　　　　　師会）ＨＰの「松塾」コーナーからダウンロードで

　　　　　　　　　　　　　　　　きます。